



流潜抛乃志海夏
全



滑誓之道深矣乎不深於斯道有至焉者
不也始事麗藻濃郁權輿夙雅古人云務
正也要且在守正耳自蕉翁之沒以來
句法變化不一於其時失巧拙於是襍旗
乎中原欲為巨擘者可以子計之也籍歟
未多咫尺玄門闕其子也極去先輩多
有品評予何添蚩足竊烏膠弗續山水調

絕世謂滑稽晉家之王莽也亦宜夫蕉翁於是
是優游卓越比之於今古嗜是道者非止
相信彼也而天下守正者寡矣况乎輓之
鄙俚蓋穢之語雖多奚取焉衆林楚味焉
痛哉當今太平餘澤吹填弄麓之士嚮
往蕉翁為善相使串咫尺可以懸至極者
不為子多也予幼而酷嗜是道中事弥

甚得蕉翁佳句恒著巾箱蘭摧玉振
亦不遺輯逸近刻者錄為小冊投無
子甲裡已多季于此屬者少可也
事探麓中所藏則小冊亦在焉因稍
刪定題曰桃白採蕉翁首倡之字蓋
有大康中入桃漁獲其仙趣者太平餘
澤與予嗜此之庶幾獲其仙趣也或人

請寄棗梓屢安不止頷之遂付書簡予
從來管見蕉翁佳句非窮日之力則片
言隻字豈能窺其斑乎是為序

丁未之夏

志陽

東溪岩嘉言誌

平安

采坡書

那ハ吾尔飯の能を去る為葉が	涼葉
海さうくさひと此啼きさう怒る急	千川
門當の二條影に露む月とて	芭蕉
そむむさきむるあ哉々の枝	宗波
秋風さう遠をたさるる雲の縹	此筋
虫さるおと月えかちあふ	濁子
乳さくさろ乃かこを下にまじ	川
ま本より夢はけりて梅市利	集
尼寺此去尼ハさうり髪割て	子

系良一むらうに内ふ了そあま
 掛渡に小神名倣をこみ落し
 今も圓城園名あく片み
 なるうちに源氏一那此志のそく
 控く浮世のやまを記信正
 物事合も伊勢此料理の藤おそ
 裸足てあうく内庭名砂
 船月に花此系おそ川さ立
 白新此ゆら此系はめさき
 石巻むを舟の系此系處

蕉 菊 川 葉 波 蕉 菊 川 系 菊

雜ノ二

地名此株う名ゆる名苗字
 交まてふそく忽麻此言とあふ
 寺名いふく口ふ反名種
 夕月に極本信うあは城の破
 兄とあ系をわけしき一軒
 先とあふ古儀鞆名一繩子
 名とあふるうちに惟子の干
 う川とあけく系うに歳ふ言う
 何とあけくあさ

蕉 紫 川 系 丸柳 系 柳 川 系

茶屋を二階き酒乃梅園
 うひらき鳥もたより年あけく
 娘志多紙はく子琴の女
 花さけハ又事くのゆる塚の上
 多芥小まきむ蓮 たんちく
 法重菴夕日神けふ精うま
 きくささあに花鳴そゆく

蕉 筋 川 ■ 紫 掛 半

拖ノ三

十三夜睡園名もく先う那
 小袖乃翻此おとさ 扇縁
 焼飯一瓜志粉漬の口咽く
 荏胡麻煮く四十かゝ法く
 雨傘法く笠乃干菜此あめり合
 ちにかき流と風呂火水巻
 切麦飯子節息くおまきく
 菓子をりハ栗搗乃罨
 杉板を刻之抄く糸寺此門

濁子 曾良 芭蕉 史邦 杖風 岱水 涼葉 蕉 良

心よりやめ此を此より
 兼乃身をも隠さ思ふと
 泪々を此柙^{トナ}為る あり
 為月夜麻乃衣此影法師
 安ま川管より新刻 蝶
 東廣法給小魚と海祿直の家
 暮らち拂ふ 片雲乃喰つ
 心はと電法とむる 初る
 空啼く旅より あり 空
 寝笑ふも柙を鞠う一葉切

子水蕉葉子風邦蕉水
 子水蕉葉子風邦蕉水

柙ノ凡

中よりちあや見り 猿え
 只是忘る隠るちと場此わら
 新しき 似やぬ 鐘以ふと記
 夢ゆる浪居此牡丹とて海家
 清く川とてある ああ那子
 望く人奇此とてあふ表り海
 足とむくみく川原りりり
 ちく好る衣小梅如雲の赤志を
 伯母の心 伝へ 故人の 志
 ちあ月 冥極の 柙を 檢るを

蕉葉邦風全邦良蕉子良

枝のくまはれ折るゝ小さた
 病をり土をせけゝ。昔のゝゝ
 溜り 神めゝゝあけ家 者 金
 神産の抄のいふ外尔安ゝゝ
 信りゝ屏風を色以文々水
 花小又花を清ゝゝ弓室棟
 ち中かゆゝゝ此をん 如 叶

邦葉風水良子葉

蕉ノ五

亦亦おとり分園乃ゝゝめうれ
 熱 ぬりゝ 旅をか申ゝ 温 船
 を及に鶴以細を踏 法 けゝゝ
 肩此を海いゝゝ 米乃 持以
 及之をい金根之目此照ゝ村時ゝ
 昔葉葉の田中ゝ 号記ゝゝ
 昔法さ此あさ如府此影を記
 抱きゝゝぬゝ歩山依を葉
 名皇子ゝゝ神ゝゝ 葉 葉

芭蕉 渴子 岱水 依之 子 蕉 水 蕉 子


~~~~~此あまき草名を写す  
鶴の柔に赤紅のりかきありて  
化物曲舞揮のり城  
根の枝垂しかひと依る此月  
映付くけり後乃最りり  
即ち経婦の紅衣をきけりり  
恨み果てや琴の糸か  
初より十拍をまよふまきり  
念を去る依指乃海多お  
年一私を市師の下くお詞く

之 蕉 子 水 馬 子 蕉 之 水 覓

梅ノ六

鳥帽子かつまふ元も隠し  
昔はけぬはき刀をたよか  
よれハ割る家るま 振 髪  
夏川にちや音の清と踏送  
道程乃中後月を見つる  
家燕とあま此草を積ま  
丁も大車に中りり  
眉ゆき海似る  
大系此緋多里り  
数多くけしけり牛も富ま

蕉 子 蕉 子 涼葉 之 子 蕉 子 蕉 葉 蕉 子 蕉 葉



冬を隣りし 鱧の心 釣り  
 神田の六里此妻と傳ひ事々  
 老くくは法なり 後とや  
 船書を水鷄乃起以痛是之  
 筆 河に流いの志しもの 江  
 雪多ふの音車に集つた花乃山  
 平向はしにあり 卯布  
 子 蕉 葉 子 蕉 葉 子

楳ノ七

中へは暖かぬもをし 菖蒲葉  
 んしきくは 青月 花  
 秋の苗去来乃 鷄の啼声を  
 雪くはくくと 山乃 雪り  
 酒飲のくせり 障子をぬき  
 赤紙抄のくせり も文紙をり  
 是のうらあて 賊をきめり  
 年をくすきく 念かあり ぬ  
 二人月此妻ふる 海を解ぬん  
 芭蕉 龍柳 路通 文鳥 越人 如行 荊口 此筋 木因



けはりし繹々し 糖進 尾々り  
少くくしそ 實まきり 座をのり水也  
書物の上ら 妙虫まきし心 控  
飽果し 糖もはは 懸し心まき  
齒ぬけと 夢水と 貝も吹まき  
月まきく 以中 何うして かきまき  
あふ川と 夢水の 台列  
一掃く 何の 山まき 夢まき  
塔まきく 辺まき 糖味 糖  
茶葉の 姿斗 何の 糖まき

殘香 曾良 斜嶺 柳 蕉 鳥 口 通 人 因

梅ノ八

村まきまきく 大り 進まき  
まきまき 實り 糖乃 道の 糖りまき  
二、凡 上子の 糖まき 何う 夢り  
揚子の 工まき 何の 夢り 糖  
鳥 糖子 何の 糖まき 何の 糖  
鳥 糖まき 何の 糖まき 大 糖  
葉まき 何の 糖まき 何の 糖  
夢まき 何の 糖まき 何の 糖  
尾まき 何の 糖まき 何の 糖  
月まき 何の 糖まき 何の 糖

嶺 筋 香 良 行 柳 鳥 人 通 蕉



藤とてそとの一株乃 藤  
 何事も雲を仕舞て涼と森  
 追子も連々一 涼水 藤  
 老獨り於て中く暮らして  
 主のつげある毎たそと  
 花の陰 徳念との 茶まら  
 梅山吹りのこゑ 花は秋

口 筋 良 香 因 行 嶺

梅ノ之

法里を山を田舎を  
 まみく 細く 煙る 嵐 電  
 けり 飛ぶ 赤ん 雲 夕  
 津 ありて 夕の 空 座 出る 月  
 残る 雲さの 門 水  
 小地 以の 赤い 雲 扇 芒  
 終る 此 水 ぬ 下 子 此 舞 一 く  
 終る 此 梅 子 一 葉 口 を 見

支考 氷之 白雪 雪丸 芦厂 桃隣 扇車 以文 桃先



世體をいのゑに九世に就き  
 億人より明てふに小神體  
 何れもまじりてなくと云ふ毎に  
 熊の子に親をとりて啼て居  
 きりて付て家の庭の之を自  
 ら申す田舎に坐す結ぶに掛り  
 顔に露を形にたきまじり  
 花散るに叔に二葉の蔭に  
 おもひていさぬ火を此に幕  
 中りておのほふおのほふ

桃後 芭蕉 考 隣 厂 丸 車 文 桃 鯉  
 極ノ十

獲子乃ちめが味香乃ち玉物  
 子をかきとまじりて巻紙を  
 想明を刻き書に付て  
 減ふにし満川の舟に去りて  
 跡に清く義の乃ち墓  
 蒼黄畑あけけりまじりて  
 小唄をまじりてたれに  
 内田に此意をまじりて  
 と云ふとありて夫婦か  
 ことひける皆中此雪を打拂ひ

蕉 之 雪 後 先 裡 丸 考 蕉 厂







塘よりきりき 藪乃下 菊  
とやくと 匿所の 跡も 初め  
誰中より あり 多 佛  
あふ入戸を 明きく 跡も 喰れ  
深き 志れ 清る 月も 龕  
中さ おを 清ら さまみ 此ま けふ  
人ふ 抱きく 糸を 切り ぬ  
花の 登ふ 小物 志を 能ふ けふ  
其乃 修 毒 法 極る 幕 串  
是より 人への ねり 起さ あり

行 号 人 水 行 人 水 行 人 水 行 人 水 行

梅ノ十二

出るに あきんといき みあひく  
下ふ 海生 子 白 志 魂 滞り  
於 蓮 喰ふ 人 此 真 片と  
とつくと 一 痛入し 目 の 見え  
堂 志 家 而 此 あり ぬ ぬ  
あふ 清く けふ 家 人 樂 此 落し  
あふ 鬼 志 一 義 中 志 父  
布 衣 袴 志 清 才 此 跡 の 風  
雲 一 宙 乃 月 一  
是より 人への ねり 起さ あり

行 号 人 水 行 人 水 行 人 水 行 人 水 行



素戸叩きく 色くゆりぬ  
 泣くくきゆくこれ等 果はほ  
 阿くく染る 影 刺くきん  
 世の弁れ 紫 冬 雲くを映りぬ  
 福くを花 曇るとまらひ ちりひ事  
 旅に 尾 流の 玉 若く十 幾 気  
 富士画かめく文 するし系  
 懐くき入くく 志 木く  
 かけぬくふ 柳 流く

蕉 水 巧 写 変 蕉 有 巧 人

蕉ノ十三

半粒やい 蚊の ぬきし 枝の 風  
 下 梅の くるく 蒲 萄 ぎ ね  
 酒 志 ちる 糸 切くく 月 若く  
 扇 口 ぬ 本 古 ち くる あり  
 吳 竹くく 雲 ち ち ち ち 海 流 床  
 蓮 乃 ち ち 系 乃 解 かく 家 考  
 及 招 も ち ち 彩 ー け 連 ー  
 遊 り 乃 樂 を ぬ ぶ ち ち ち  
 体 々 も 瘡 ぬ ち ち の 顔 ち ち ち

芭蕉 路通 史邦 丈草 去来 野章 正秀 蕉 通



薄汲かきせん 隣りふれ花  
ちふ下あるくしおと遠く  
のほも 寄る川 藤乃下藤  
林まゝ又下志起う 茄子汁  
藤根湯く 信平此月  
之別の卯辰書く 年のこれ  
花く 清くまゝく 浮世さうり  
花町ありあゝのいぢぬ花の色  
島嶼くく 春そ 冬くく 冬  
人々後幸澤此園と書く

邦 州 来 章 秀 蕉 通 邦 州 来

物ノ十世

産月まても 花花むりけ  
憂るを辻井お清く 清くは  
細書あり乃 海く きれく  
硝子千々く 清く 茶 酒  
たも 茶 咲ハ むく 清く  
草むる 病はか申る け掛信  
明石の 藤ま 古教うら ち  
大く 冬 同く 中く 船 所  
ちくく 似 ちぬ 礫か ち 記  
ゆるさ 水て 如 申 中 此 書 記 元

章 秀 蕉 通 邦 州 来 章 秀 蕉



敷くらせぬ志のこゝろは此月  
白ひもあさきくあうしつゆし  
又も龜乃りあゆみ道出  
手に持て物えあふいそし  
坤のけさぬいさへし  
等此世よの痛しとさあし  
柳と風を扶てそぬく

通 邦 州 来 孝 筆

ためはけくあふしつゆし  
凍りる去りし柳とさぬ 菖  
雲風し眠る日向のきくねて  
花白も此りうく 荷  
名はくお押あふの秋の香  
さる岸端し月の一寺  
きめくや鳥帽子もあふし  
眉細むもあふし 舟  
あふしつゆしあふしつゆし

芭蕉 昌碧 亀洞 荷 野水 聽處 越人 舟泉 執筆



干飯乃有此冷らにもあし  
あて事さる布子若よ来空の比  
あみさう川ヨミく能ハ是くは  
門路者顔える人きあうらり  
後り雨とも事此いあ川ま  
能福く一藤くうう後の破り  
あの噂やと 獲さくは 月  
そつくと津家ふあのかれつ  
耀もあくそ 解るくくひあ  
石さうり本も由くくくあくと

洞 碧 水 兮 蕉 人 處 洞 泉 人 處

柳ノ十六

約籠ありれハあにとされく  
夕顔者あふあ付久くはと  
布衣二本あき 奪く一た  
深くれく妹をあつふ人も来れ  
食禁事一を 供く泣くり  
旅さう此んをむさたあれや  
事ハ發利ふか後川の水  
輝のきくく事此れも男にけり  
卵さかひあき 粒つさけく  
月あふあ端を滑くそあひ入

處 人 兮 蕉 碧 泉 水 洞 人 兮







物喰りくき藤あり。襟  
 又多きくく海邊一つ  
 擦籠りて見ると橋ある山の側  
 市らくのきく紫人々の色  
 橋造る家も淋し記事如風  
 三月月細く言ひあうり  
 橋を入る神川のきく家の陰  
 英法侍りあうり聲ある  
 御已佳りきさお髪と探あれ  
 橋く常盤此百本名の井  
 葉 蕉 行 葉 蕉 行 葉 蕉 行 葉

ともかゝれり候して是をきくと此ぬ

月代をきくやあり村時雨  
 小松名かりありぬ冬山  
 男藤花嶽の建間此本くれ  
 名去あり海あり出る川  
 酒接姫流る板多も一里程  
 襟より押込押くく人々  
 物事より愈む日何り五々  
 数縁ありき南に北芭  
 等々れお髪申り心多結掛  
 千川 芭蕉 此筋 左柵 洒堂 海動 此水 蕉 川



泪も恋よりいさぎ 古 位  
 言 鉦ハ年 七人 しく 小 来 ころり  
 多 風 呂 ころり 言 此 津 津 し  
 妙 くと 葉 九 乳 くと 家 かけと 船  
 傷 くと 痛 此 くと 窓 くと へ 家  
 伊 くと 舟 津 津 の 舟 を かけ 入 くと  
 下 板 乃 法 くと 糸 旨 定 定 くと  
 也 くと 此 必 小 あり くと 友 の 枝  
 き くと 車 にも せ くと ぬ ち ち くと 日  
 嵐 蘭  
 柳  
 動  
 水  
 川  
 蕉  
 丈 草  
 川

柳ノ十九

名 月 や 藤 吹 ぬ 此 時 を 待  
 貴 くと 枕 中 くと くと ぬ 虫 の 音  
 け 船 を 庭 くと 定 出 くと くと くと  
 向 くと 定 到 乃 津 の あり 海 み  
 増 くと ぬ 鼻 歩 くと くと 懐 くと  
 世 くと くと 坂 中 くと くと くと くと 鬱  
 穢 人の 矢 先 の け くと くと くと くと 握 くと  
 多 くと くと くと くと くと くと くと くと  
 入 口 くと 津 あり くと くと くと くと くと  
 渴 子  
 芭 蕉  
 千 川  
 涼 葉  
 此 筋  
 子  
 蕉  
 川  
 筋



まり 綯 奪 出 詔 板 を 解  
 亦 著 り 其 ち 一 日 夕 涼  
 滌 々 若 々 多 良 洗 心 帷 子  
 伏 見 を 下 り 亦 是 然 出 座 ぬ 事  
 食 此 亦 一 日 也 喰 食 々 々 秋  
 自 新 立 由 ぬ 一 思 不 爲 帽 子 髪  
 雨 の 聲 乃 却 々 心 一 味 瘡  
 甚 嘆 不 亦 爲 此 車 引 け け け  
 ち け け け け ぬ 事 此 南 風

子 葉 川 蕉 筋 子 川 蕉 筋

柵ノ北

野 阿 比 小 極 吹 立 ち け 柳 哉  
 山 け け け け 日 後 藤 乃 露  
 池 月 也 先 西 雲 散 々 向 々 人  
 波 の 音 々 々 人 一 日 あり 事 け  
 木 を 引 々 枕 入 膝 一 心 甚 け  
 海 老 心 著 け け 事 甚 干 一 瓜  
 柳 け け け け 憐 此 招 を 亦 け け 人  
 過 事 さ 亦 け け け け 武 士  
 け け け け 人 若 々 人 け け け け

不 知 荆 口 芭 蕉 如 行 左 柵 殘 香 斜 嶺 怒 風 知



寂多此西法抄りうけり  
 竹青此譜をそいあやあかん  
 茶之川ぬる 月まら 小蓮  
 落着くそ碇少くそくろり  
 細代乃鮭を市小出さるる  
 赤の形はくそくそくそ  
 上落くそくも 流此まくそ  
 花少くそくそ乃そ橋印くそ  
 粥りくそくそ 烟乃山吹

蕉 行 抑 蕉 香 炭 知 行 風

梅ノ六二

本指くそめる間まき入湯少  
 毛を川 鴨をのそ家 姐 扱  
 掛乞の中振着くそ 袴是くそ  
 少くそ終くそ 本履くそ 通  
 梨乃枝井りう法解しそきたそ  
 桶尔色あそそ 草あくそあく  
 杖ぬりう架くそくそ 響此宿  
 嵐乃 渡る 梁乃 弓  
 六月廿日も照くそくそ 柞の本

荆口 洒堂 芭蕉 此筋 龙柳 大舟 千川 荻 堂



子敷者入一荷繩ゆるまる  
加不深斗うけく世まる浄をま  
善乃面も遊此果る明あり  
菴少中法動有押る以藤乃蔭  
依くま此桑蔭をく秋  
月代も小くた里此離ま深  
子繩印くくまるく流く心  
盃きくおきりえぬ花盛  
き北上りのちる 伊勢

柳 菴 川 堂 舟 川 菴 蕉

柳ノ五二

風竹きささきとくつねと山  
とさ家法くき雪此見所  
眺たらし里の垣根く餌とじて  
黍乃折逢ふ乃細きあり  
多明此おまへん乃新に家  
流りあ乃入く心 あり  
作店きまわらう足きま歩くらん  
芥子奇くあり竹蔭せー村  
被元顔色くろく押る後く

落 梧 芭 蕉 荷 兮 越 人 羽 笠 舟 泉 野 水 梧 蕉



木の髪刺さるゝつたし  
 精切しく重持かまのりしを  
 紅紫ののろろ 萩切山  
 通海者 烟草此わかれあり  
 祝もおきて居るう 秋乃野  
 糸もつき 琴撥あはれ舟の下  
 赤の月の見えぬ眉のくはくし  
 西のまて 鏡持事の花さうり  
 返らり 蝶もささうりり  
 ちくく空 霧うぬるのき余とて

弓 人 笠 泉 水 梧 人 水 泉 笠

梅ノ九三

破く又ぬる 此橋れく  
 夕暮を 福もゆめ蓮池  
 川も 侍のゆき 梅れ 吹も  
 追海る 本懐乃る 法流つれ  
 半ありきし 葎おろし  
 床さられの 縁と書さして 藤入  
 女師を乃 自とちさるる  
 雪のけり 砧う 洞窟うり  
 紫霧く 翠れく ねそちう  
 砂うく 姑あをささるる 家乃て

蕙 兮 水 蕉 梧 人 兮 水 泉



終一牛を以て押以給り

水

柳ノ世記

|                    |
|--------------------|
| 今や此翁は道もなきおぼへし女に唐草  |
| をたかひ女はわらふ海をゆくまきあり  |
| あゝさうさくしきかきふ海なるらん   |
| 子ノ井ノ底にさかすまのきり      |
| またあつちよあつちよあつちよあつちよ |
| うらららぬさわたるの上のきり     |
| うらららぬさわたるの上のきり     |
| うらららぬさわたるの上のきり     |
| うらららぬさわたるの上のきり     |



空井氏をかしこひやうくよる人  
 と柳のまみふらむさうらふの山  
 一風くまふたぐりあふまはる  
 りあふく道のちとてあそび神の  
 ちとあふまふさうらふ谷澄か換  
 柳にあまふらむ作らぬあんとみ  
 の柳のちとあふまふさうらふ

車世

柳の枝

追加發句

春

山甲も人肥く梅乃さきう那 圃更  
 春は言まふ言ふお淨い 也 嵐月  
 おりらや夢の中らるむの喜 白朗  
 之さふ思え念ふや雛乃鳥 瓜坊  
 雪の小えさうさくし、初喜 馬来  
 ん地さき雛のうさうらう那 津橋  
 花地乃乃水うささき 行上田 風遠  
 新甲一啼くめてる地うな 雲帯  
 沂山



犬のふれまゝに松ふき日、つゝ

伯田三房

古聲

春思

遠く恋のお国をむすふ柳

杜粟

斗もやして狂女ありくや喜れぬ

江島吟

圃丈

多め菜や已うさへくせといふ

瑤雀

さや蘇鉄の唐紙朝

美川川

洵河

日あこりいと梅のむきーや懐子

小八二

巨川

香を抄ね晴よるるーもめうく

揚少燈

君中

春とのこるりーくぬ喜のき

永おな

嵐来

田の水や舟よりとるー啼

若ト

鬼雀

夏

ゆよりもあー此一室をくあせり

尾陽

曉臺

牡丹咲くく急流の孔雀又ゆり

紫曉

明けやくれれーやらる故帳の縁

葵

あなまのむりーきさる針道は

夕イコ

百呻

浪流そんずる皆休ーくふれ

皆白子

無曲

恙楓さるふく得れぬあ

長赤る笑

薰里

夏雨の降りやとるき

魯貢

くらねーはさるるさる山や雲れ

借川

山流や啼そるるも尿とる

田原

毛條



初菘子つりくねしきさきき  
 古運ふ山子のあれつー  
 けきくー權さりあや時  
 扇子おろけ口もさきむ文  
 繻ほく嚇もさきと門 涼  
 みりあや田、引あのみき流  
 ぶりあれえや夕を詠中  
 文を湯の志やくを帯てむ  
 中言ふ扇さりのする 管  
 海川やめさのほくみりあ

松 鶴  
 淳 路  
 鬼 若  
 楚 畔  
 重 厚  
 五 雲  
 百 二  
 拍 由  
 芦 涯  
 湖 山

秋

おさるゆきとるあふ 月さる  
 秋の風あれえふまゝ人の心、  
 川あややあふかくさる月  
 名月の明あやさるあや  
 秋さや柳 急さる 畑乃中  
 たけさぬ秋さるさるめ良  
 けりさるやあふのさるさる  
 月のあふさるさるさる  
 蛇さる掛さるさるさる

江 涯  
 山 文  
 春 水  
 上 毛  
 専 車  
 珠 卜  
 笈 多  
 洪 水  
 貫 厄  
 依 兮



姥於のううううの月  
 野さや香もくはれそ丸喰  
 この虫の糸つれくとうま  
 若もすうう丸喰れそ月  
 ち船悪の人う 函をたおさう  
 砂地むむ野菊ふ秋の日お丸  
 秋風や湖氷こく屋すほの  
 ちそーくまののちのあや月一  
 ちちぬさくくちを後人や秋の雨  
 舟此月羽此青のをるれ

残後 桃路  
 甲斐 黒沢  
 佐上田 如毛  
 甫尺  
 百池  
 野鶴  
 野鶴  
 巫席  
 歌雄  
 悦溪  
 ナニ  
 下市  
 田  
 ツルカ

冬

雪のね若ゆーるりは初  
 冬終るはくまを敷けけ  
 口のむはるさくささりく小  
 ちるや 黄冬 けく葱 ちり  
 お割くく明あむ氷う  
 とま六はるのさく丸の時  
 米えく 花々 けく 水  
 丹代や 氷すれ川 ち  
 信鹿や さまく 中とま

ナニ 二柳  
 ハリニ 春  
 ちカタ 千羅  
 赤  
 舞  
 不ト  
 水  
 流  
 定尔  
 サツ  
 完尔



さひしきそをふまきく初時  
若津 十二八 月  
 伝や伝を伝のそこの水車  
和下市 尺丈  
 志賀の若もねり伝るう一時  
又久保 孤舟  
 伝清やあ志のよりてまね  
又久保 吐山  
 伝伝うとそくふ伝や精明り  
又久保 衣冠  
 巨雄別く伝伝るそ名のそく  
又久保 思外  
 伝伝りてん伝るそく  
又久保 化十  
 伝やあるねりねく小ねり伝  
又久保 魯長  
 水伝や船子ゆて伝るそく  
又久保 尚古  
又久保 立向

蕉翁清名集

伝蘭文 志別東伝  
 著一冊

奇仙七部拾遺

伝車蓋 志別東伝  
 著一冊

半化白集

伝車蓋 志別東伝  
 著二冊

天明八戊申仲秋

伝車蓋 志別東伝  
 著一冊

書林

伝車蓋 志別東伝  
 著一冊

京

伝車蓋 志別東伝  
 著一冊



